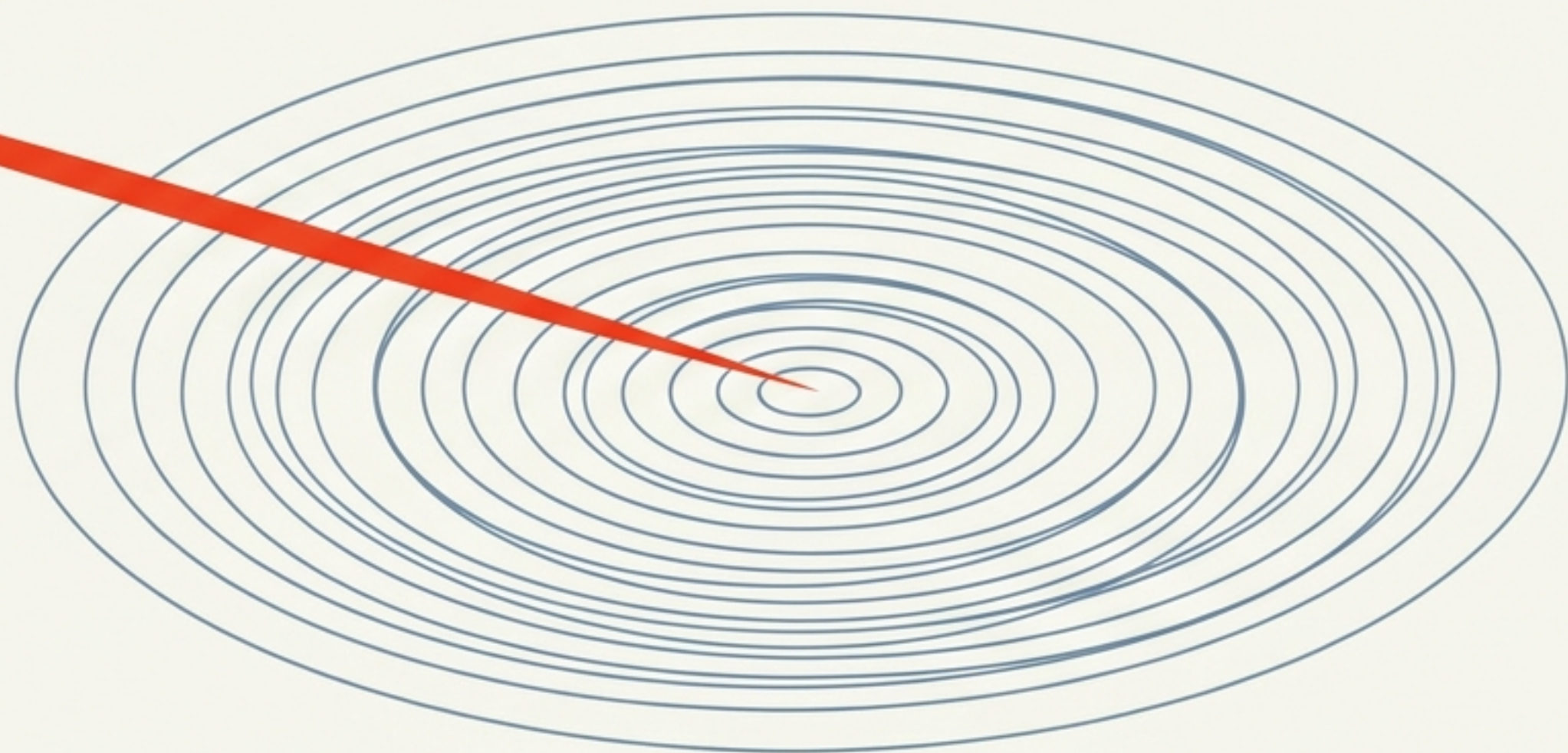
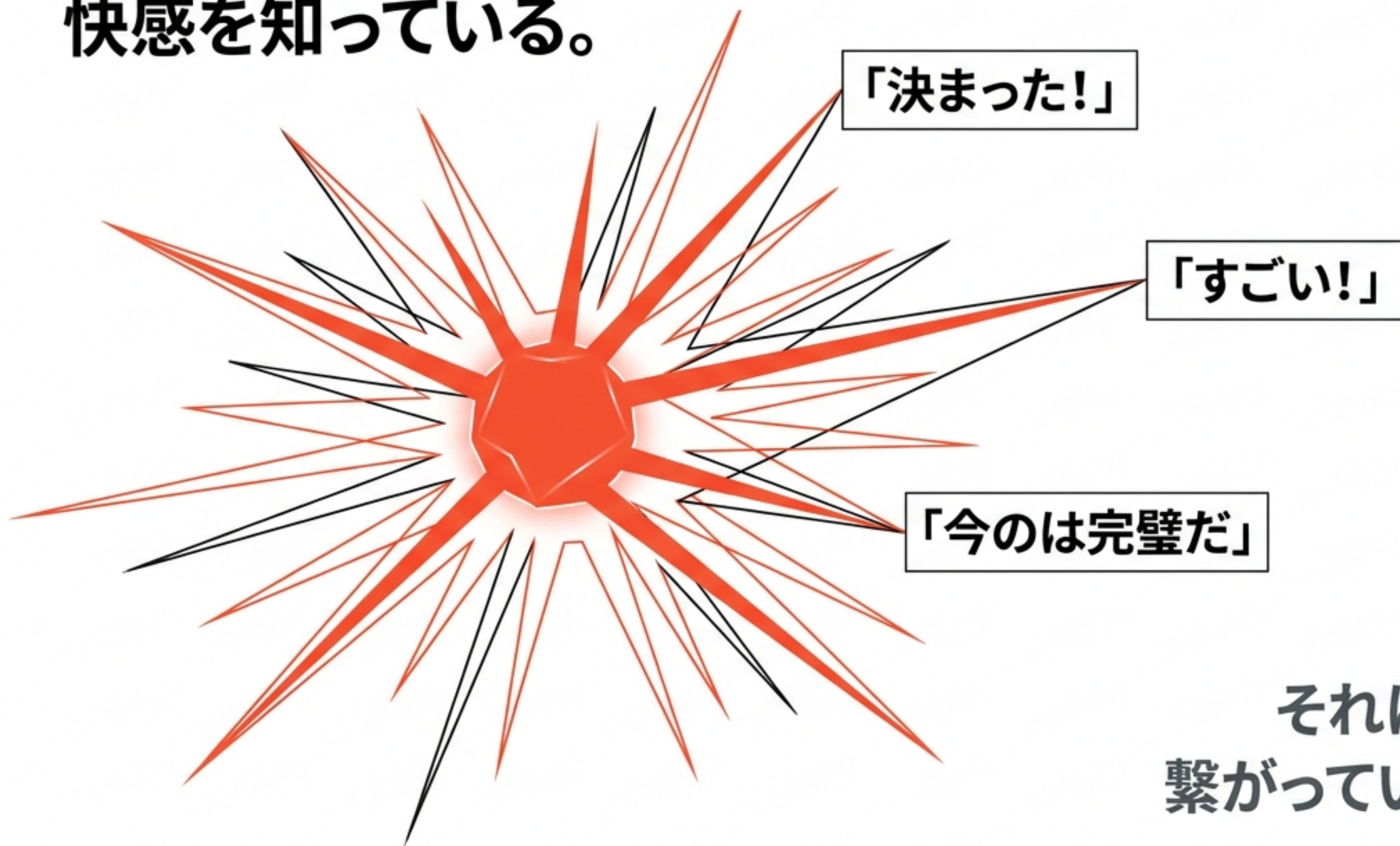


「ナイスショット」の罠

歓声の裏で失われている「見えない流れ」の正体

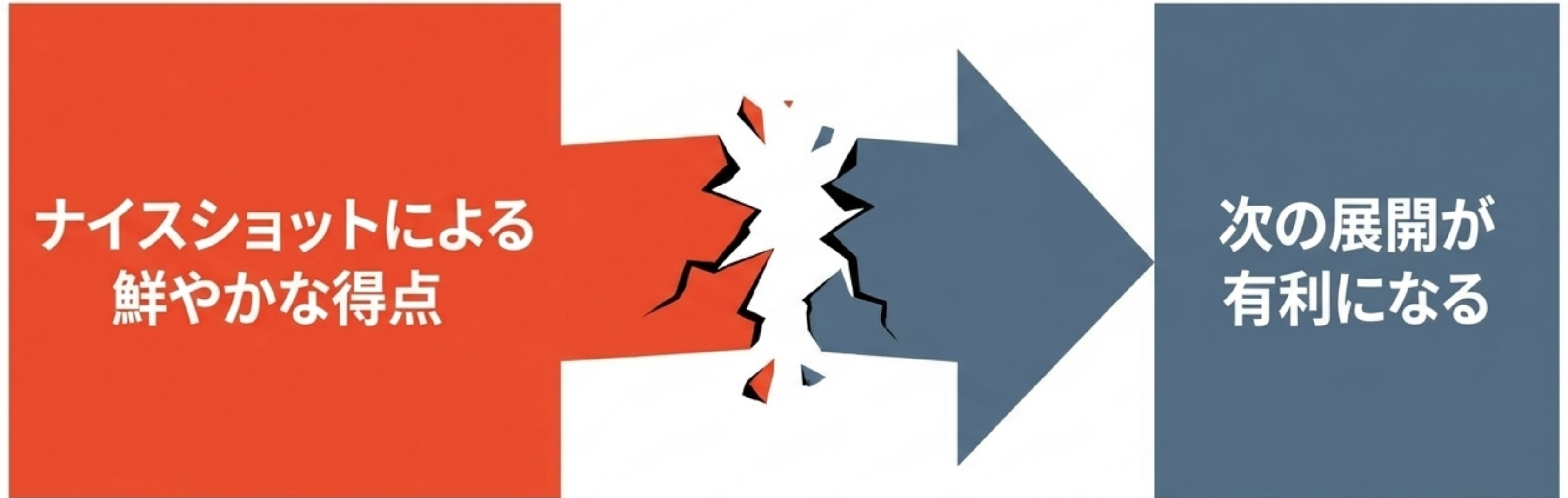


誰もが、その一撃の
快感を知っている。



しかし…
それは本当に「次」に
繋がっているのだろうか？

気持ちよく取った1点が、次の1点を取りやすくするとは限らない。



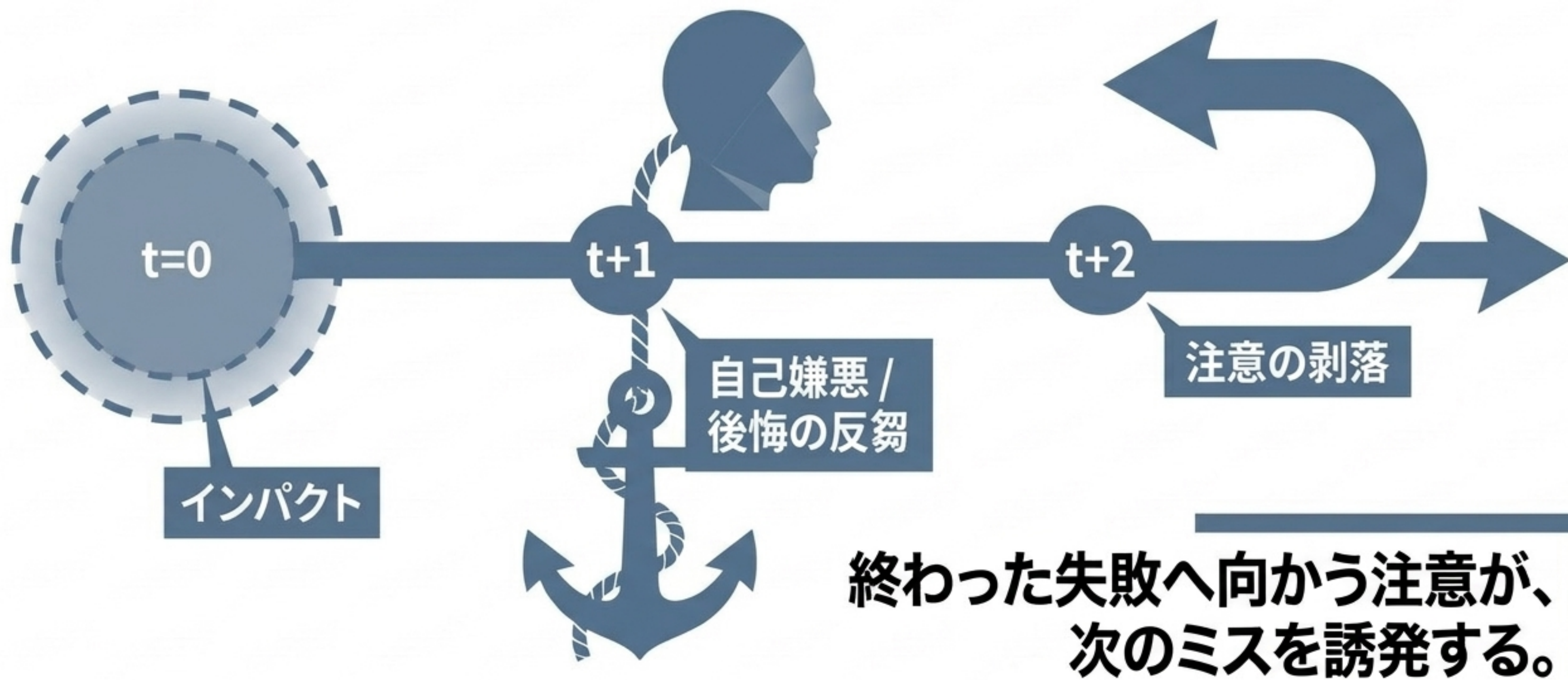
この2つはイコールではない。同じ「1点」でも、その直後に相手の心に何を残すかによって、試合の「流れ」は全く異なる方向へ動き出す。

ナイスショットは、相手の意識を「未来」へ向かわせる。



**派手な一撃は、
相手を覚醒させてしまう。**

何でもない球でのミスは、相手を「過去」に縛りつける。



同じ「1点」がもたらす、全く異なるその後の展開。

比較軸	ナイスショット	何でもない球
自分のリスク	高い(ミスが増える)	低い(無理をしていない)
得点時の見栄え	鮮やか(称賛を浴びる)	地味(派手な見せ場はない)
相手の意識の向き	未来(次への準備)	過去(終わった失敗への後悔)
相手の精神状態	警戒心アップ・覚醒	集中力ダウン・自滅思考
次の1点の取りやすさ	取りづらい	取りやすい

相手を次の一本に向かわせる得点と、過去の一本に縛りつける得点。
その価値は等しくない。

それでも、私たちは「魔法の一撃」を狙ってしまう。



「勝ちたい」という言葉の奥に、何を欲しがる自分がいるのか？

勝利

勝利

勝つための看板

自己顕示欲

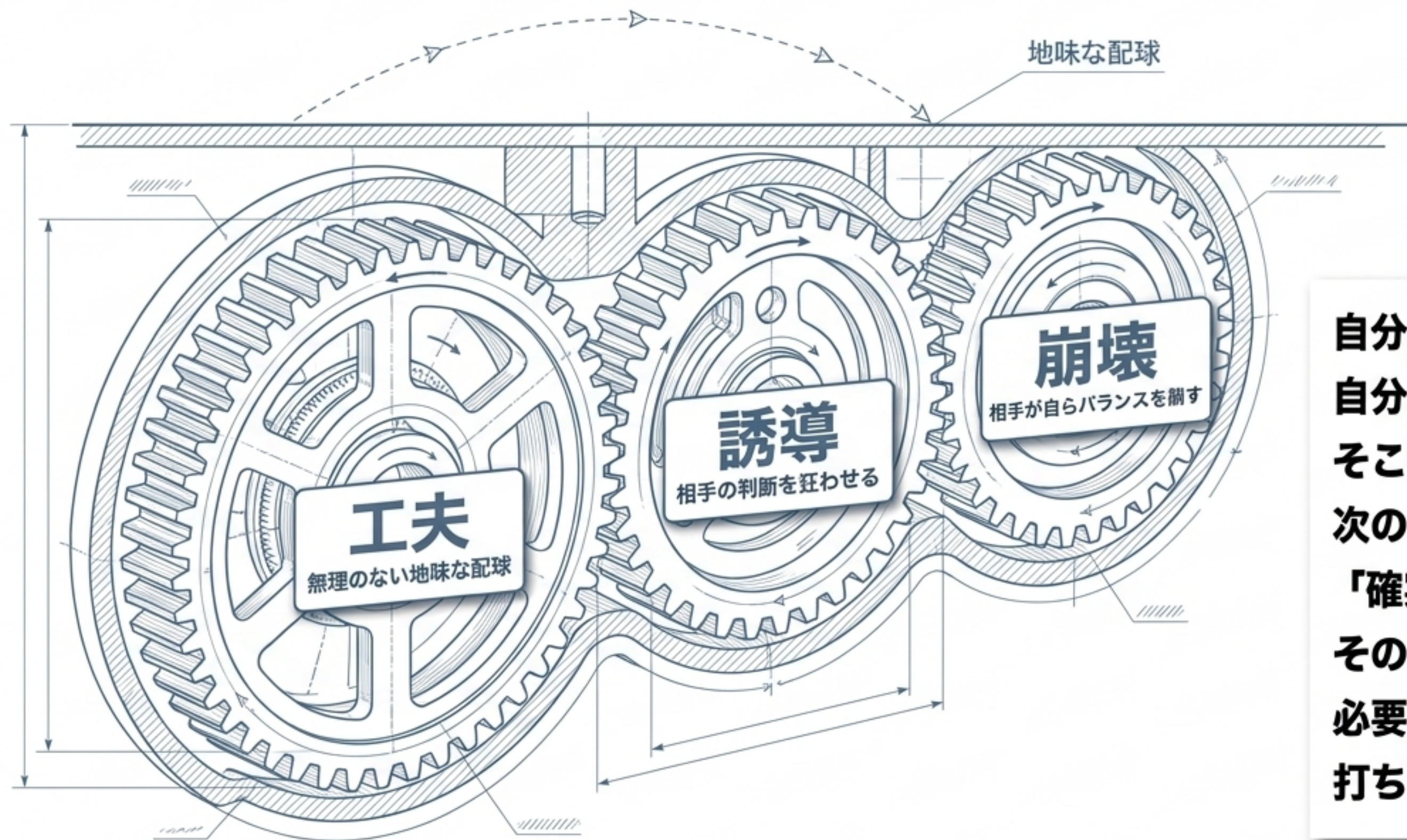
“本当に欲しかったのは勝利か。
それとも、自分が輝いた瞬間か。”

— レン (選手) の葛藤

自己顕示欲

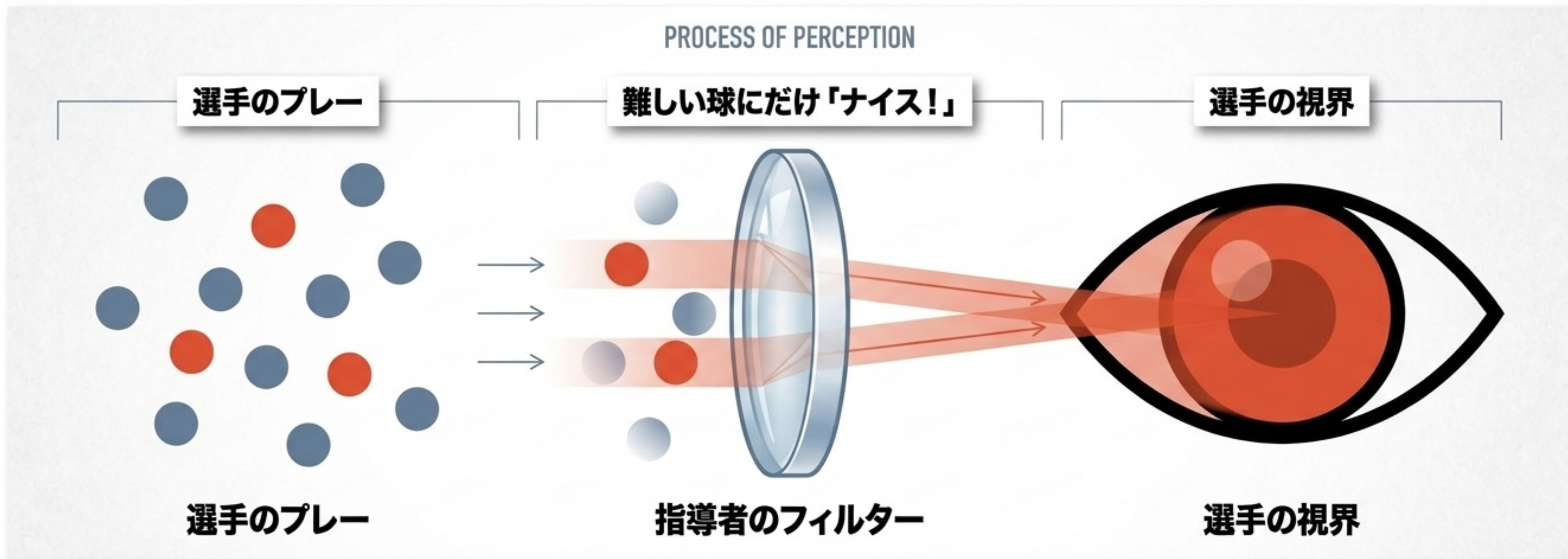
自分が輝いた瞬間

「相手が勝手にミスしただけ」ではない。



自分のすごさが見えない得点、
自分の工夫が生きている。
そこに派手な見せ場はないが、
次の一本を取りやすくする
「確実な仕事」がある。
その価値を認められなければ、
必要のない難しい球を
打ち足してしまう。

指導者の「声かけ」が、選手の視界を決める。



難しい球を決めたときだけ声を上げていたら、選手は難しい球を求める。
地味な配球で相手の判断を狂わせた瞬間に気づき、その仕事を言葉にできるか。
指導者の目が、選手の目を育てる。

「決まればすごい」と「狙えば勝ちやすい」は別の次元にある。

鮮やかさ
(決まればすごい球)

戦術的価値
(狙えば勝ちやすい球)

相手がうまくプレーできない状態をつくる視点。自分がすごい球を打つことに夢中になるほど、この視点が抜け落ちる。

歓声の先まで見届ける。

Impact (決まった瞬間)

決まった瞬間で、考えるのをやめるな。
その一打は、相手に何を残したのか。
自分は、そのあとも有利に戦えているのか。

快感を追うプレーから、勝利をつくるプレーへ。